備陽史探訪
第101号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

足利氏鞆に起り、鞆に滅ぶ

会長 田口 義之

〝潮待ちの港〟鞆ほど研究者の頭を悩ませる地名はない。伝説では神功皇后が渡守神社（現沼名前神社）に武具の〝鞆〟を奉納したことに由来するとも、鞆港の地形が武具の鞆に似ているためその名が付いたとも言われるが、これらの説は全て後世のこじつけであって、もとより信ずるに足りない。それよりも〝とも〟は邪馬台国時代（西暦3世紀）の投馬（トーマ）国の遺名だとする説に魅力を感じる。

広く瀬戸内海の北岸を見渡してみると、岡山県の玉野に始まって、玉の浦（尾道の古名）・玉祖（山口県）など〝たま〟の付く古い港が分布しているのに気付く。投馬国鞆説はその面積が狭隘なことから否定的な見解が多いが、広く瀬戸内海の北岸（いわゆる吉備の国）をその比定地とすればどうだろう。〝とも〟は〝たま〟と共通の語源を持つと考えられるから、投馬国の名は早く失われてしまったが、たまたま周辺の港にのみその名をとどめた、こう考えれば良いのである。

それはさておき、鞆が日本史の大きな舞台となったのは、室町幕府の将軍足利氏との関わりにおいてであった。

その結び付きは、初代将軍足利尊氏に始まる。ご存じのように、室町幕府を開いた足利尊氏の悩みの種は、後醍醐天皇を敵に廻したことであった。当時の日本では天皇の権威はまだ生きていた。如何に全国の武士の期待を担った尊氏といえども〝朝敵〟の烙印は重荷であった。そのため建武三年（一三三六）正月、一度は京都を占領しながらも、後醍醐天皇方の反撃を受けて九州への都落ちを余儀なくされたのである。しかし、さすがに尊氏である。ただでは転ばなかった。この時、尊氏は側近の助言を得て、密かに使いを当時逼塞していた後醍醐のライバル光厳上皇のもとに遣わしていた。上皇の朝敵追討の院宣を獲得して、戦いを〝君と君との軍にせばや〟と画策したのである。光厳上皇の院宣は、同年二月十五日、尊氏一行が丁度備後の鞆に滞在中に届いた。〝錦の御旗〟の到来に尊氏軍の意気は大いに揚がった。そして、九州に下った尊氏は瞬く間に同地を平定、大軍を率いて東上し、京都に幕府を開くことになるのである。〝足利氏鞆に興る〟と言われる所以である。

尊氏にとって鞆は自分の生涯を決めた忘れ難い地であったようだ。現在、ここには足利氏が全国に建てた安国寺が法灯を伝えているが、鞆のような狭い場所にそれを建てるにはよほどの思い入れがあったはずである（もっとも現在の重要文化財釈迦堂は鎌倉時代に創建された金宝寺の遺構で尊氏は単に寺号を変えたに過ぎないが）。

しかし、尊氏にとって鞆は、生涯消えることの無かった実子直冬との骨肉の争いの発火点となった地としても、忘れることのできない場所であった。

尊氏には後に室町幕府の二代将軍となった義詮のほかに少なくとも二人の男子がいた。一人は義詮の同母兄で夭折したことがわかっているが、もう一人長兄にあたる人物がいた。それが後の直冬である。しかし、その母が遊女であったためか、長く父子の対面を許されることなく、少年時代は不遇の境涯にあった。この直冬に温かい手を差し伸べたのが、尊氏の弟で直冬には叔父にあたる直義であった。実子に恵まれなかった直義は、直冬を自分の養子として晴れ舞台に立たせた。養父の後押しで長門探題に任命された直冬は、貞和五年（一三四九）四月、備後の鞆にやって来た。だが、直冬の立身は、長く続く実父尊氏との戦いの始まりでもあった。その直後、尊氏と直義の全国を二分した争い、〝観応の擾乱〟が勃発、養父直義に味方した直冬は実父と地獄の闘争を繰り広げることになるのである。

直冬が本拠を置いたのが、現在は円福寺の境内となっている大可島である。ここは当時、鞆港の出口を押さえる要害で、直冬が去った後も南朝方と北朝方の争奪の巷となり、幾多の悲話を伝えている。

◇

鞆は、古くから開けた港町である。最近、遺跡としての鞆が注目を集めているが、発掘してみると、鎌倉・室町時代の遺構は勿論、平安・奈良時代から、更には弥生や縄文の遺物に出くわすと言う。

邪馬台国時代の投馬国云々は別にして、この地が港町として古くから栄えたのには理由がある。鞆の沖合は、瀬戸内海の東西から入り込んで来る〝潮〟が丁度ぶつかるところである。東から来る船はここまで満ち潮に乗ってやって来て、鞆港で一休みした後、こんどは逆に引き潮に乗って西に進めば楽である。西から来る船も同様に、鞆を中継地として〝潮〟に乗って東に航海した。これが鞆が〝潮待ちの港〟と呼ばれる理由である。

古来、この地で、船出を待った人は多い。万葉歌人大伴旅人も任地への往復の途中、ここで歌を詠んでいるし、初めに述べた室町幕府の創始者足利尊氏もそうである。

しかし、鞆が船旅の中継地であっただけに、ここに足を止めた旅人の中には、中央の権力闘争に敗れ、都への望郷の念に燃えながら、空しく〝船出〟を待つ者も多かった。天正四年（一五七六）二月から、天正十年（一五八二）までの六年間、この地に本拠を置き、都への帰還の夢を、この〝潮待ちの港〟に託した室町幕府最後の将軍、足利義昭もその一人である。

義昭が備後の鞆にやって来たのは、言うまでもなく織田信長によって京都を追われたためである。すなわち、永禄十一年（一五六八）九月、信長に擁せられて室町幕府十五代将軍となった彼は、初めのうちは信長に恩を感じ、両者の仲は親密であったが、自己の地位が信長の〝傀儡〟に過ぎないのを悟った義昭は、次第に信長の存在を疎ましく思うようになった。そして、元亀三年（一五七二）、ついに信長打倒の旗を挙げたのである。結果は、義昭の敗北であった。山城槙島城に三千八百余人で籠った彼は、信長の攻撃に一たまりもなく降伏、ここに二五〇年続いた室町幕府は幕を下ろすことになるのである。

歴史家は、信長の義昭追放をもって室町幕府の滅亡としているが、栄光の室町幕府の看板を自分が下したとは、彼自身は全く思っていなかったらしい。義昭自身は紛れもなく現職の征夷大将軍であるし（ここで誤解があるようだが、この時義昭は将軍職を首になったわけではない）、京都を離れたのは、単に反逆者信長の難を避けただけである。プライドの高い彼は、こう考えた。そして、あくまで自分は天下を治めるべき現職の将軍であるとして、各地を放浪しながら、全国の大名に信長打倒の檄を飛ばしたのである。

義昭が一番頼りにした大名は、安芸の毛利氏であった。当時毛利氏では英雄元就が世を去ったとは言え、毛利両川と呼ばれた小早川隆景・吉川元春は健在で、その勢力は大坂の石山本願寺と結んで摂津・播磨（兵庫県）に及んでいた。義昭が毛利氏こそ、と思ったのも無理はない。そして、毛利を動かすべく、先に述べたように、天正四年二月八日、備後の鞆に〝動座（どうざ）〟したのである。

彼が、居を構えたと伝えられるのが、現在鞆の浦歴史民俗資料館の建つ〝鞆城跡〟である。鞆鉄バス終点で下車し、港沿いの道から町中に入ると、左手に小高い丘が見えて来る。これが鞆城跡である。駐車場から登って行くと、左右に刻印を打った石垣が目につくが、この石垣は義昭当時は無かったものである。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の後、福島正則が芸備の大名として広島城に入って来るが、この石垣はその正則によって築かれた鞆城の遺構である。義昭時代の古い石垣は、丘の下に民家に隠れるように低く対潮楼の方角に続いている。

義昭が鞆にやって来たのは、前号で述べた先祖尊氏の吉例に倣ってのことであることは間違いない。天正六年（一五七八）正月、彼は浄土寺の古文書を一覧して証判を加えているが、浄土寺は初代尊氏が上洛途上立ち寄り、戦勝を祈願した足利氏縁の寺である。先祖の筆跡を見た彼は、室町幕府の再興に熱き血をたぎらせたことであろう。

だが、彼の夢は叶わなかった。天正十年六月、宿敵信長が本能寺で倒れ、彼の前途に光明が射したかと思ったのもつかの間、信長の天下統一事業は秀吉によって引き継がれ、義昭は歴史の流れに取り残されて行くのである。

鞆城跡の東に接して〝神明亭〟と呼ばれる安土桃山時代の庭園の跡が残っている。義昭の居館の一部ではないかと言われるこの庭園跡に立つと、枯山水の石組もなんとなくみやびて、戦乱の中でも将軍たる品格を失うまいとした彼の執念が伝わって来そうである。

〝鞆幕府〟は、幻に終わり、足利氏はついに〝鞆に滅んだ〟。義昭に関しては「陰謀将軍」だの「流れ公方」だの負のイメージが強い。しかし、信長・秀吉といった英雄を相手に一歩も引かなかったところなど、彼もやはり一個の英雄と言えるのではなかろうか。

『備後福山領古城記』（1）

城郭研究部会

沼隈郡

【註】

古神嶋　真木嶋玄蕃允　①
佐和村　名倉雅樂頭　②
同　佐和越後守　③
郷分村　皆内出雲守　④
山手村　杉原伯耆守　⑤
同　同名備前守　⑥
津之郷村
御殿　将軍義昭卿　⑦
同　坂部丹後守　⑧
同　阿部重兵衛　⑨
同　横山長左衛門　⑩
赤坂村
長者原　新庄太郎兵衛　⑪
神村　野気沼掃部　⑫
岩井石見守　⑬
新庄
本郷村　古志清左衛門　⑭
天正年中輝元公之タメニ吉田ニテ生害妻子出雲国へ立退家臣宇野佐藤其外侍牢人而當地ニ止ル
城焼拂ひ石垣崩シ破却ス

城郭研究部会では月に一度、古文書の学習会「『備後古城記』を読む」を実施しているが、会員の方の中には『備後古城記』がどのようなものであるか、ご存じない方も多い。これは「備後叢書」を除き『備後古城記』の刊本がないためと思われる。そこで今回から『備後古城記』を活字化してご紹介することになった。

世に『備後古城記』は数十種あるといわれている。これから連載する『備後福山領古城記』は、福山城鏡櫓文書館に所蔵されてる「鶴濱文庫」の中の一冊である。

本古城記の奥書に「寛文四年甲辰五月六日　木野山村弥治兵衛先祖ヨリ所持罷居候由ニ而持參借受写置申候風早采女正通宗」とある。

寛文四年（一六六四）は江戸開府から六十年を経て、四代水野勝種が、父勝貞の死により、三歳で水野家を襲封した翌年である。この頃すでに木野山村（現府中市木野山）の弥治兵衛は先祖から受け継いだ古城記を所持していたことがわかるが、この古城記の由来については、まだ披見していないので不明である。

『備後古城記』の成立は、水野勝成が備後へ入封ののち各村に差出帳を出させ、その中から古城主の部を書出したものが原本と思われるが、本古城記は最も古い写本であろう。

しかし、深津郡の項に「手城村滋野左近（茂野左近ヵ）」とある。手城村は寛文六年（一六六六）の地詰によってできた村である。本古城記は風早采女正通宗の自筆本ではなく転写本であるから、その際加筆されたものであろう。

備後福山領古城記の表紙と奥書

【註】

①真木島昭光。山城国真木島城主、十五代将軍足利義昭に従い、天正四年（一五七六）二月初め頃、鞆に下向す（「吉川家文書」・「小早川家文書」）。

②応仁年中の人（一本古城記）。

③佐波越後守景房、天文年中杉原家臣（一本古城記）。

④大内義隆に属して、郡代となり安那郡下竹田大内山城に居り、天文の初め郷分村青ヶ城に移るという（『沼隈郡誌』）。

⑤伯耆守匡信、山名遠江守家老（一本古城記）。

⑥杉原備前守（豊後守）理興。理興の出自については、八尾杉原氏説（『福山志料』・『西備名区』）と山手杉原氏説（『萩藩閥閲録』）がある。

⑦織田信長に追われて近畿を流浪の後、天正四年二月初め頃鞆に下向。義昭が津之郷へ移った時期については、天正六年・十年・十一年などの説がある（「吉川家文書」等）。

⑧丹後守光政。串山城主田辺氏の家老（一本古城記）。

⑨末葉阿部平馬、水野日向守へ仕う、知行三百石（一本古城記）。

⑩長左衛門隆国。天文三年（一五三四）神石郡草木村楢原山城より移る（『沼隈郡誌』）。

⑪太郎実秀。室町時代の人。沼隈郡「新庄長者實秀五重塔婆建立寄附之錢二十貫文」（「西国寺再興寄附帳」）。

⑫掃部頭重信。大内氏の旗下に属し永正年中居城、後防州三田尻へ移る（『古跡誌』）。

⑬古志豊長の臣、当村浄福寺に石塔あり（一本古城記）。

⑭清左衛門豊長。三原にて誅殺されるとも（一本古城記）。

思い出紀行　吉備路散策

足立　捷一郎

平成十一年十月十六日(土)、同僚とともに四人で吉備路方面の散策に出かけた。山陽自動車道、国道一八〇号線を経て最初の探訪地、作山古墳に行った。前方部から東の後円部頂へ松林の山道が通じているので、落ち葉を踏みしめ頂上まで登った。全国第九位の大きさの古墳である。

つづいて国分寺跡の五重塔を見ながら造山古墳に向かった。

駐車場には音声の出る案内装置がある。麓まで歩くと墳丘までの石段があり、途中我々を歓迎するかのように二匹の蛇に出会った。前方部に荒神社があり、その境内にくり抜式長持型石棺があった。この造山古墳は仁徳・応神・履中三天皇の陵墓に次いで第四位の大きさである。

「落ち葉踏み　登る古墳に　蛇二匹
歴史の遺物　守るがごとくに」

ここをあとに鬼ノ城に向かった。駐車場には十数台の自動車が駐車し、後からも自動車が続いて来た。

約三〇〇m登った所に「角楼」といわれるところがあり、柱穴等が整備されていた。ここより少し登った所に景色のよい第一展望台があり、老夫婦や団体の家族連れなどが沢山来ていた。展望がよく、遠く岡山市街、水島工業地帯、瀬戸大橋方面などが一望できた。

この展望台から鬼ノ城探訪コースである、中央の森林浴コース(第一展望台→森林コース→らくらくコース〔湿原、礎石群等有り〕→第二展望台→展望パノラマコース→第一展望台)を廻ることにした。

山道を歩いて少しのところで、今日二回目の蛇に出会った。途中、数名の人が道を整備していたが「まむしに注意して下さい」といわれた。第二展望台には休憩所があり、その一〇〇m北には見晴らしのいい石垣があって岩と松の緑が織りなすすばらしい景色が見られた。また、眼下に鬼ノ城ゴルフ場の緑が際立って目に入った。

それから第二展望台まで戻って南側の展望パノラマコースに向かった。「屏風折の石垣」といわれる岩が見られ、先に行くに従って目を楽しませるハイキングコースである。

第五水門、東門、第四水門、第三水門、南門、第二水門、第一水門と各遺構をたどり、西門跡を最後に、元の角楼、第一展望台へ戻った。

この鬼ノ城は吉備津彦命に征伐された湿羅の根拠地と伝えられて有名であったが、実は朝鮮式山城であることが判明している。

吉備津彦命が吉備にやってきて、地域の人に尋ねると、鬼ノ城にいる「うら」という悪者達が悪いことばかりするという。早速「うら」退治を始めた。「うら」をめがけて弓で矢を射るが、「うら」は大きな岩を投げつける。勝負がつかなかった。

これは射た矢が、「うら」の投げる岩と途中で衝突して鬼ノ城まで達していないことがわかった。そこで一度に二本の矢をつがえて射ると、一本は岩と衝突したが、もう一本は鬼ノ城に達し、次第に「うら」は傷ついていった。そして鬼ノ城から裏から流れる川は彼らの傷ついて流す血を吸い、赤く染まった。「うら」は鯉に化けて川を下って瀬戸内海に逃れようとしたが、それを知った吉備津彦命は鵜に化けて、この鯉を喰ってしまった。この伝説に基づいて矢置岩、矢喰宮、血吸川、赤浜、鯉喰神社などが生まれている。

山頂には三kmの城塁が推定され、石垣・水門等かなり特色を残しており、山頂平坦面には礎石群もあって国の史跡に指定されている。しかし、古代の築城のこともあり、誰が、何時、何の目的で築城したかはまだ明らかにされていない。

鬼ノ城一帯は、平安時代に新山、岩屋とともに山上仏教が栄え、大規模な伽藍が多数立ち並び、西方教化の中心地であったといわれている。

「石垣に　そびえる松の　緑映え
　めぐる鬼の城　心ははずむ」

鬼の城をあとに足守へ向かった。

足守は宮路山を背景にし、その麓に造られた木下氏の陣屋町である。

足守藩は秀吉の正室北の政所の実兄木下家定が二万五千石を与えられて成立した。長男勝俊の時、領地を没収されたが、次男利房が大阪の陣の功で再び返り咲き、以後明治維新まで続いている。ちなみに三男延俊は豊後日出藩主、四男は早世、五男は有名な小早川秀秋である。

足守プラザ前の駐車場に駐車し、昼食は「花水木」というレストランでの足守特製ラーメンである。

足守プラザは格子窓に漆喰の壁、瓦屋根の姿の建物。歴史の町並みに溶け込み、新しい情報発信と文化交流、そしてやすらぎの場として親しまれている。足守の歴史を産業、観光等について見られる所である。

つづいて町並み散策を始めた。最初が備中足守まちなみ館である。江戸後期の商家を再現した館内には、地元の人々の手による神楽面等の民工芸品を展示している。箱階段や格

子窓、虫かご窓等、商家独特の意匠が印象的である。

山陽女子短大の学生がボランティアで、明日の祭りのため、清掃、ペンキ塗り等を行っていた。

次に藤田千年治邸に行った。ここも学生が清掃等を行っていた。係のおばさんがいろいろ説明してくれた。江戸時代末から戦前まで醤油造りを続けた足守の商家を修復。本瓦葺き入母屋二階造りで漆喰塗りという豪壮な邸内には、初代藤田千年治のころの醸造工程を再現している。

ここより少し行くと駐車場があったが、イベント会場作りをしていた。その裏手に足守藩侍屋敷遺構（県指定重要文化財）があった。木下家国家老杉原家の邸宅である。約二五〇〇㎡の敷地に長屋門、主屋、湯殿、土蔵等が建っている。

次に近水園、足守文庫に行った。

木下家の庭園近水園は、足守川から水をひいた遠州流の池泉回遊式庭園である。池に臨む吟風閣は、六代目木下公定（きのしたきんてい）が宝永五年（一七〇八）幕府御用として京都の仙洞御所を普請した際の残材を拝領し、この地に建築している。

足守文庫は木下家の古文書類、その他調度品、緒方洪庵や白樺派歌人木下利玄らの遺品が収蔵・展示されている。この文庫では係の人が予約なしに入館させてくださり説明もしてくださった。本来は予約のみの入館で鍵が掛けてあるところである。足守文庫の近くに大変大きな金木犀があり、匂いがきつく、橙色の花びらが地面いっぱいに落ちていてオレンジの絨毯を歩いているようだった。

もと来た道を駐車場に向かった。途中、足守歴史公園に立ち寄ったが、小さな公園で、園内には庭石、灯籠等が庭木の間に配され、塀には足守ゆかりの人物達を描いた銅板のパネルが設けられていた。

次に足（葦）守八幡宮へ向かうことにし、途中、緒方洪庵の生誕地に立ち寄った。小高い鍛冶山の麓に生家跡（県史跡）がある。生家跡の屋敷のほぼ正面中央には、昭和二年（一九二七）に建てられた「洪庵緒方先生」の石碑があり、この石碑の下には洪庵のへその緒・産毛とともに、元服の時の遺髪が埋められているといわれている。

洪庵は文化七年（一八一〇）足守藩士佐伯左衛門惟因の三男として生まれた。医学を志し、研鑽に励み、天保九年（一八三八）大阪で開業し、蘭学塾（適塾）を開いた。福沢諭吉、橋本左内、大村益次郎等多数の門下生がいる。

現在、裏山の鍛冶山にトンネルを造り、バイパスの建設中であった。

足守八幡宮は葉田葦守宮ともいい、応神天皇・神功皇后・仲哀天皇を祀っている。参道にある石鳥居（国重文）には「康安元年（一三六一）」の銘があり、在銘の鳥居の中では、我が国最古のものといわれている。

次に竜王山にある龍泉寺に行った。ここは八大龍王を祀っている。境内には太閤腰掛け岩や指で揺れる大きな岩、そしてのっぽの松等があった。この寺の奥まったところにきれいな池（龍王の池）があった。

次に最上稲荷に向かった。駐車場より土産物屋が両側にずらりと並んだ参道を歩いたが閑散としていた。

狭く長い門前町のつづら折れの参道四〇〇mを抜け出ると、眼前にインド風のパコダにも似た真っ白な石造りの仁王門がそびえ立っている。

売店で絵馬を買い求めた時、いろいろ最上稲荷の説明を受けた。

隣にある妙教寺にも詣った。ここは平安時代のはじめに備前四十八ヶ寺を創建した報恩太師が開いた寺で、元は天台宗であったが、その後、栄枯盛衰を繰り返し、近世初頭、日蓮宗として再興されたところである。

次に備中高松城跡に向かった。

ここは「浮世をば今こそ渡れ武士の名を高松の苔に残して」と辞世の句を残し切腹した清水宗治の城である。天正十年（一五八二）、秀吉は三万あまりの軍勢をもって高松城を包囲し、足守川をせき止めて水攻めした所である。その後、この地は宇喜多氏の所領となり、高松城は廃城となった。現在高松城址には宗治の首塚だといわれる五輪塔が本丸跡に残っている。二の丸、三の丸は水田となっている。観光客が多かった。周りを見渡して本当にここで水攻めがあったのかと不思議な感じがした。

「記念碑の　周りの山々　遠く見て
　首塚悲し　水攻めの城」

ここをあとに吉備津神社に向かった。神社は本殿及び拝殿が国宝に、南北の両随神門が重要文化財に指定されている。神社の門は通常随神門といって、櫛石窓神・豊石窓神を祀ってあるが、この神社の門は吉備津彦命に随って吉備の地にやってきた神々を祀るという理由で随神門といっている。南随神門を中にはさんだ回廊が本殿西側の斜面を南北に、美しい曲線を描きながら三〇〇mも続いている。途中から右に折れたところに重要文化財の「お釜殿」があった。雨月物語に「吉備津の釜」として記載されているところである。

ここを最後に福山に帰った。

益田氏の系譜について

塩出　基久

益田氏は平安後期の永久年間（一一一三～一一一八）石見の国司として都から下向した藤原鎌足の子孫「国兼」を始祖とする鎌倉時代以来、西石見地方に勢力をもった武家である。

国兼が「上府・現在の浜田市」の御神本に土着した事から当初は「御神本」と名乗ったと推定されているが、四代の「兼高」が建久年間（一一九〇～一一九八）の頃、本拠地を益田荘に移してから「益田氏」と称するようになった。

益田氏はこのとき以来、慶長五年（一、六〇〇）の「関が原」の戦いの後、毛利氏が防・長二国に削封された際に「元祥」は徳川家康から所領安堵があったにもかかわらず、先代の「藤兼」が毛利氏に服属していたので毛利輝元に殉じて長門国須佐（現在の山口県阿武郡須佐町）に移った。

それまでの鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土・桃山時代までの約四〇〇年間「益田氏」は益田の地を本拠地とした有力武士団として勢力を誇った。

益田氏の系譜を以下に記しておきます。

始祖・国兼―兼実―兼栄―（4）兼高（益田氏）―兼季―兼時―兼久―兼胤―兼弘―（10）兼方―兼見―兼世―兼家―兼理―（15）兼堯―貞兼―宗兼―伊兼―藤兼―（20）元祥―広兼―元堯―就宣―兼長―（25）就恒―就賢―元道―広堯―就祥―（30）就恭―房清―元宣―親施―親祥・・・と維新まで連綿と家系が続いている。

益田氏は戦時の備えとして

▼「七尾城」（四代・兼高が一一九三年ころ築いたとする説と、六代・兼時が一二〇〇年ころ築いたとする説があるが定かな資料はない）」

▼地域支配の拠点としての「三宅御土居」（最近の調査で十二世紀頃には建てられていたとの可能性がたかくなっている）」

▼さらには蒙古来襲に備えた「石見十八砦の防塁」を築いている。

益田氏の中で節目の時代を過ごした当主の動きを列挙してみる。

始祖・国兼の曾孫「四代・兼高」は源義経の軍に従って軍功をあげ鎌倉御家人となり石見国の押領使に任ぜられる。さきにも述べたが、この時代に拠点を「益田」に移し益田氏と称することとなる。

南北朝期に「十一代兼見」が家督を継いでいるが兼見は庶子家であった。動乱の最中に庶子家は南朝方に属し、総領家の北朝方と対立が続いたが庶子家の「兼見」が総領家を継承している。貞治三年（一三六四）大内弘世が周防・長門・石見の守護となり、益田氏は周防の大内氏と結ぶ事になる。

「一五代・兼堯」は、当時山口で大内政弘の庇護をうけていた「雪舟」を益田に招いたとされ、雪舟筆になる「兼堯像（国重要文化財）」が残されている。

「応仁の乱」応仁元年（一四六七）～文明九年（一四七七）では「兼堯」とその子「貞兼」が大内政弘・陶弘護に従い、大内教幸とこれにくみした吉見氏の討伐の戦闘に参加、これを破っている。

「一九代・藤兼」の時、大内氏が滅亡した。大内方に組していた益田氏は吉川元春の斡旋で毛利元就に帰属する。吉川家と益田家の間柄であるが藤兼の子「元祥」の室に吉川元春の長女（吉川広家の姉）が嫁している。この時の毛利家帰属が先に述べた益田の地を去る遠因となる。

しかし長門国須佐に移っても、益田氏は長州藩の永代国家老として一二、〇〇〇石を領している。「二十代・元祥」は理財に長じており削封による毛利氏の財政危機を救い長州藩の基礎をかためている。二一代・広兼は早世しているが、孫の「元堯」も理財に明るく、寛永末年から正保年間（一六四〇年代）の第二次・長州藩の経済危機を救済し、長州藩の中枢を担っている。

益田家はその後も存続、維新後は当主が「男爵」に任ぜられている。最後になりましたが、「益田家文書」の存在について述べておきたい。益田家文書は石見の豪族益田氏に伝来した一万点に上る「武家文書」で山陰地方の資料としては質・量ともに随一のものである。

全国的に見ても関東から西国に移住した武士でなく、この地にあってこれだけの史料が残っている武家の例はない。特徴的なことは、主人と一族・家臣の関係、「当時の武士達のあり方」などの記述が多く、当時の生活・社会のあり方の解明に注目されている。

この文書は東大史料編纂所に所蔵されており、史料編纂所の手でこの文書の刊行の準備が進められている。この刊行によって益田氏に関する研究が一層進展するものと見られており、その刊行がまたれている。

備陽史探訪の会一泊旅行
西石見の面影を訪ねた

小島　袈裟春

雑誌「少年倶楽部」を夢中で読んだ子供の頃、作者の名前は忘れたが、確か「天兵童子」と云う「織豊時代」を背景にした小説の中で主人公の少年が、出身地を問われて「石州の津和野で御座る」と大人言葉で答える場面が印象的で今も記憶の底にある。

昭和四十年台の初、当時の津和野に付いて、市内の側溝に鯉の泳ぐ町として観光面での宣伝中で、これはその頃、高度成長の歪みの出来始めた環境破壊の対策として、かなり強烈なインパクトを持ち、全国的に模倣する企業や市町村が続出したのであった。福山市も例外ではなく、市内の道三川に鯉を放したのであったが、道三川の鯉がその後どうなったかは私には分からない。

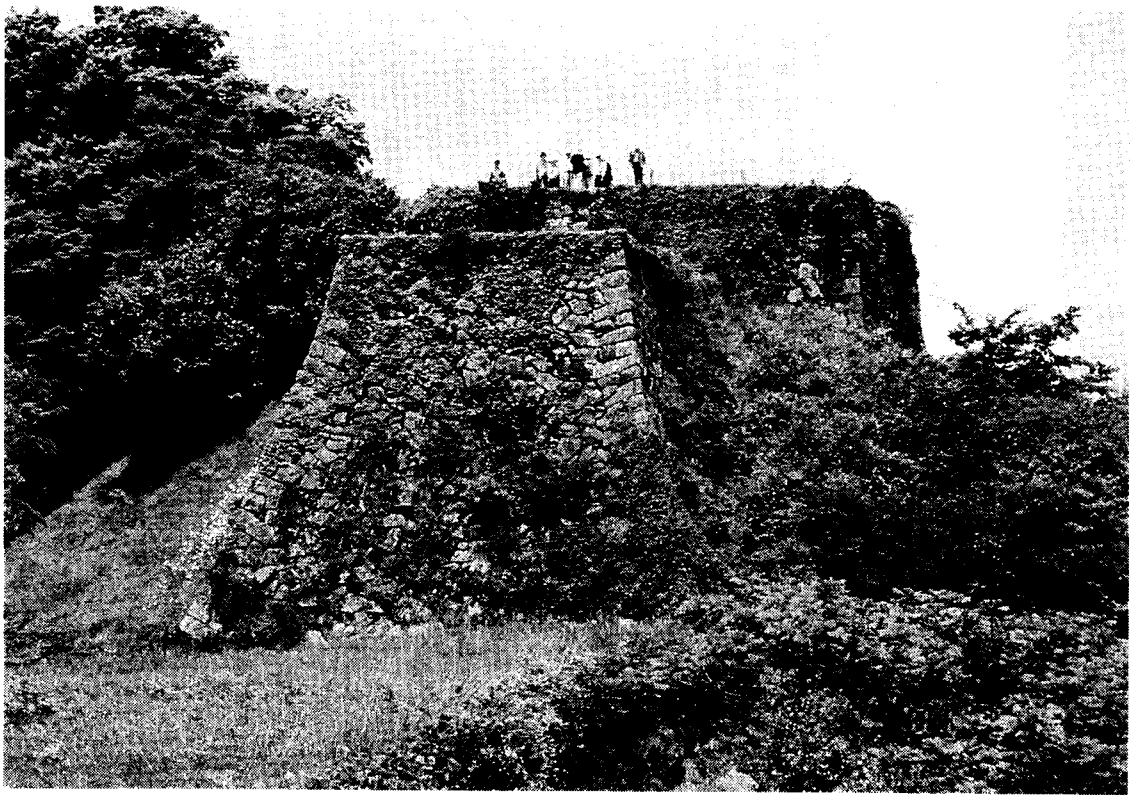
▼津和野城跡

さて今回初めて石州の津和野を訪ねる私の、一番の興味は津和野城跡であった。天文二十年(一五五一年)陶晴賢が下克上で主家の大内義隆を滅ぼした後、同二二年、義隆の姉を妻に持つ城主吉見正頼は単独で兵を挙げ陶・益田の連合軍を相手に約五ヶ月も籠城した城は興味深々である。

城跡はほぼ南から北に流れる津和野川に添った町並みの、左岸の山頂（比高）二一二mにあった。登山リフト終点から南西に五分で一～三mの石垣をめぐらした東出丸、更に十分で大きな堀切の先に数段の厳重な石垣に囲まれた城址が現れた。

腰郭の右手に舛形の東門、其の右三段の石垣に守られて広い台所丸、左側に天守台、右に変形枡形の西門、其の先は三の丸である。天守台の東側一帯は高さ六～七mの石垣が続き、城の最高所三十間台と云う最大の郭で、北端に太鼓丸南端に人質丸がついている。三十間台からは津和野の町並は勿論四方の展望が良く絶好の立地なのであった。

この城は先に記した如く吉見氏が永仁年間（鎌倉末期）に土塁と切岸の工法に依って築城に掛かり約二五年後の正中元年（一三二四年）に完成したとの事で、現在の如く石垣作りに改築したのは、約三〇〇年後の慶長六年（一六〇一年）吉見氏に代わって入国した坂崎氏なのだそうだ。すると天文二二年(一五五三年)陶・益田の連合軍を迎え討った、吉見正頼五ヶ月の籠城戦が只一度、しかも土塁の城での戦いであった事になる。



津和野城跡（三の丸より人質櫓をへて霞世間台を望む）

さて津和野城址を訪ねて幾つかの疑問が出た。

▼一つは石垣の石である、この山の石は破砕性の石で積み石には使えない。全部どこからか運んで山上に引き上げた物であるが、大きく割石と野面石（比較的小さい）に分かれる。野面石はおもに東門周辺に使用され、割石は三十間台周辺、特に人質台、三の丸と西門に著しい。この使い分けは何を意味するのか。

▼二つは天守台の位置である。展望が効くのは南側の一部のみ、しかも西門の正面で枡形の一角を形成する場所なのである。

▼三つは本来なら本丸と呼ぶべき場所を三十間台と称している事である。これらを総合、考察するとある答えが出る様にも思うのであるが、どうだろうか。

坂崎氏に付いて

坂崎出羽守直盛が、大阪城落城の時、徳川家康の孫娘『千姫』を救出した事は事実であろうと私は考える。又家康の「救出した者に千姫を与える」との言葉も事実と思う。ただし坂崎出羽守直盛が救出するとは思わなかったのであろう。

其の証拠に、事後の家康は坂崎氏を貶める事ばかりやって居る。備前から石見の外れに追い払い、禄高も三万石と増やさない。城の改築も黙って見ていて十六年後、姫路藩の本多忠刻と千姫の婚儀が整うと、幕府はあっさりと坂崎氏の抹殺を計ったのであろう。其の直前「千姫救出」の賞として、一万石の加増があったとの説もある。随分と人を馬鹿にした話で、坂崎出羽守直盛の心中は察するに余りある。

それにしても千姫襲撃の噂は誰が流したのであろうか。直盛は遂に自刃して坂崎家は断絶となった。家臣に殺害されたとの説もある。但し永明寺に残る彼の墓の説明に依ると、領民には名君と慕われ墓は町年寄りが建立したとある。謎に包まれた事件だが今日の講師は、言い掛かりを付けて大名の整理を始めた幕府の政策の最初の犠牲者ではないかと云われた、私も同感である。

▼鷺見八幡神社

吉見氏が鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮から勧進したとの事、本殿前の楼門の屋根が萱葺きで珍しい。背後の社叢に千年を越す杉の木が神々しく立っている。又参道の前に中世の流鏑馬馬場が整備されて居て、現在も毎年四月古式の流鏑馬神事があるとの事。

▼殿町通りのカトリック教会

津和野には幕末から明治六年に掛けてキリシタンの隠れ信者の悲しい殉教の歴史がある。殉教の場所乙女峠には行かなかったが殿町の教会に寄り津和野の「歴史文化財ガイド」と永井隆著「乙女峠」を購入し合計千六三〇円を備付けの代金箱に入れ、土産に代えたのであった。

▽二日目、益田市　柿本神社、私が柿本人麻呂に興味を持ったのは梅原猛著「水底の歌」読んでからである。昔、益田市の沖にあった鴨島が人麻呂の辞世の歌「鴨山の磐根しまける…」に相当し、人麻呂はこの島で刑死したとある。しかし他の方々の同種の本と読み合わせて見ると、鴨島で刑死したとの梅原氏の説には若干の無理がある様にも思える。その辺の考察が出来るかどうか、が私の楽しみなのであった。

私は柿本神社で一冊の本を購入した。其れによれば鴨島に人麻呂神社があったが万寿三年（一〇二六年）の地震と津波によって海没し、神体が松の木絡まって流れ寄った近くの海岸を、松崎と名付け神社を再建し柿本神社と称したとある。又現在の社殿は延宝九年（一六八一年）時の藩主亀井慈親が高津長幸の居城、高津城跡二の丸に移築したとの事。今の所分かったのは其れだけである。

▼七尾城跡（益田氏の居城）

益田平野の南東部、北東から北西へと大きく蛇行する益田川の屈曲部の左岸、北から南へと登る小谷を挟んだ東西の尾根上に約六〇〇米に渡って大小の郭を連続させ、最高部は本丸の比高一一〇mの巨大な山城である。

谷筋に家臣団の屋敷が連続し大手の道があったそうだ。東西尾根の合する所に厩の段と大井戸が設けられ、武士は乗馬のまま本丸近くまで往復出来る。当時の大手門が近くの医光寺に移築されて居るが、旗印を付け乗馬のまま通行出来る高さがある。最近の本丸跡の発掘調査に依ると、礎石のある居住用の家が建ち並び、家の各部屋毎に暖房用と思える炉の跡があって、四季を通じて通常の生活が行われて居たと推定されたとの事である。

本丸の背後南側には深い堀切を隔てて土塁を持った逆エル字形の郭があり、其の東側に十六条の見事な畝状竪堀があった。

▼万福寺

幕末の第二次長州征伐の時、浜田藩と備後福山藩の本陣とした寺である。本堂は国の重要文化財で雪舟作と伝承のある優美な庭園があった。

本堂は新しい瓦の寄せ棟形の屋根であるが、寺で頂いたパンフレットの江戸時代の絵を見ると入母屋なのである。いち早く気づいた平田氏が寺の方に質問したのであるが、何故か明快な答えはされなかった。其の代わり脇の陳列棚を見学したら、大きな入母屋用の古い鬼瓦が展示してあって近年、屋根の大幅な改造が有ったことが判明したのである。

▼医光寺（臨済宗）

享保一四年（一七二九年）全焼し間もなく再建されたのだそうだ。内庭は第五代の住職だった雪舟の作とされ国指定の名園との事。先にも記したが七尾城の大手門であった高さ七m、幅四・五mの豪快な総門がある。又幕末の第二次長州征伐の時、この辺りに福山藩の主力が布陣したのであるが、村田蔵六（大村益次郎）指揮の優れた戦術と武器の前に一溜まりもなく敗れ、一四名の死者を残して逃げ帰った。死者は地元の人達の手で医光寺の裏山の裾に葬られたが、現在は全く所在不明だとのこと。

さて帰りのバスに乗ったとき、備陽史探訪の会副会長の中村氏が「戦のため異境の地で、草むす屍と消えた福山武士の為に一時の合掌を」と先唱された。さすがと思う。

平成一三年五月

人前結婚式

石井　しおり

明るい空に鯉のぼりが、腹いっぱいに大気を孕んで雄飛する五月四日孫娘の人前結婚式に出席した。所は〝上州の空っ風と嬶天下〟で有名な群馬県高崎市にある英国風建築の結婚専門式場で、ザ・ジョージァハウスであった。

あれは昨年の暮れ、本人から突然「結婚する」の第一報があり、私の四人の孫たちのうち、いちばん地味でその気も見せなかった娘だったから、どんな異変が起きたのかと私の心中は不安でひとかたではなかった。

彼女は幼時をフランスで過ごし、その父は仕事に多忙でヨーロッパを東奔西走する毎日であった。そんな折、家に帰る野原で捨てられた白い子犬を拾い、自分が世話をするという約束で育て始めた。その〝シロ〟は十三年目の今も老犬ながら家族の一員として過ごしているのだった。

その頃からの体験は自然界や動物への愛情と関心が強くなり、長じては獣医を目指してA大学に通った。無事国家試験もうかり、その名の通り畜産が古来から盛んな群馬県庁に入った。その行政も手厚くその上、昔ながらの人情は彼女にいつしかこの地に骨を埋めたいと望むようになったのだろうと思われる。

二人は始めて社会人として同時にスタートした県庁での同期の桜である。彼は建築課、孫は獣医師として社会の荒波に船出した時、運命の出逢いを感じたのではないか。

人前結婚式は、万端を当人たちが立案・準備し、収支を取り仕切るものらしく、開宴までの私は不安の連続であった。まず、開会の辞があり人前式の説明、新郎新婦入場、二人のプロフィルの紹介、誓いの言葉、指輪の交換、誓約書への署名、ヴェールアップ、乾杯、開宴の辞など、順調に進められた。

雛壇に鎮座した二人の晴れ姿を見やりながら食前酒を楽しむ。各テーブルを見回すと出席者は約九十人程、その2／3は若者が占め、これは両人の学友・職場の仲間、上司各々おひとり、学友の中には仕事先の北海道・鹿児島から馳せ参じた清新な気溢れる面々があった。

あとの1／3は親族と両親・姉弟で、若者主導の会場は質素ながら和やかな雰囲気で進行する。新郎のK大学同級生によるにわかベル合奏団は、〝わが道を往く〟を時折音程を崩しながら合奏・合唱をし、新婦のA大学院同級生は、すこしボス的だった彼女に、悲喜交々追憶の涙交じりに祝意を述べ、或いはピアノを弾いた。

その中の何といってもの白眉は、新郎と幼稚園からずっと大学まで一緒だった隣家の幼友達が、やおら立ち上がり小学校五年の時の作文集を手に高く示した。

「一哉君おめでとう。お前は今から十四年も前に、もう今日の予言をしているんだぞ。いつか先生に引率されて水族館へ行った事を覚えているかい、その時の感想文がこれだよ。『ノコギリのような鮫の歯に噛まれて見たい』とな。その念願が今夜あたり叶ってその痛さがイヤと言う程わかるだろうよ」と。

祝酒に綻んでいた列席のみんなが、いっきに爆笑の渦になる。

壇上の二人は顔を見合わせてニッコリ。孫娘の旧姓は鮫の「さめじま」である。

改めて紹介すると、花婿のご両親は生粋の上州人で同じ在所のご出身である。国定忠治の赤城の子守唄をもって有名な赤城山を望む前橋で温泉の多いのも住みよさの中に入るという。

花嫁の父は九州鹿児島である。その昔鎌倉幕府は時宗の時代に元寇の役に動員され、駿河の郷士であった彼の先祖は防人として下り、それ以来鹿児島市と指宿の中ほどにある加世田という所に本拠を置く、その末裔のひとりである。鮫島姓は駿河の生地の名を取ったものといわれ、日本民謡歌手の鮫島有美子さんも同族らしい。

上州と鹿児島の縁組みの不思議さを祝盃を挙げ乍らつくづく思った。

それにしても上州女権王国の中へ核家族、しかも平等意識の強い帰国子女の孫が、どのようにして婚家に馴染んで行くか、折りあって暮らしてゆくか。花の宴は華やかに進み、いっぽう私のお腹の暗部はシクシクと急性胃炎の兆候が始まった。

何はともあれ質素な人前結婚式の弾けるような雰囲気は、未来の幸せを自分の責任に施て作ろうという本人たちと、それを見守る大勢の友人達、親族たち一同の飾らぬ心情に溢れながら推移して行く。

そして日頃、探訪の会に集わせて頂くからこその、遠い古来のことへ思いを馳せている自分をしみじみと思う人前結婚のお式であった。

平成十三年五月四日

親と子の古墳めぐり

小林　裕文

今年も毎年恒例、そして僕は七回連続の古墳めぐりの参加となりました。

毎年この日は朝が早いのでそれが一番つらいですが、遅れてはいけないので今年も早起きをしました。電車で福山へ行き、受付をすませバスで出発しました。今年のコースは僕もまだ行ったことのない津之郷～赤坂コースでした。古墳めぐりの始めに津之郷小学校で発会式を行いました。そして今年も古代人？なる人物が登場してきました。来年もまた登場してくれるのでしょうか。いよいよ最初の古墳に向かいました。最初に本谷一号墳を見学しました。この古墳は石室の前の部不部分がつぶれていましたが全長九mの長さだと聞きました。中に入ることはできなかったけど結構大きいなあと思いながら見ていました。この古墳は六世紀後半に造られたそうです。

次に坂部古墳群にゆきました。本谷古墳群からは十分ぐらいの所でした。まず四号墳です。横穴式石室で全長約八mで神社として利用されていました。こういうのはあまり見たことがないので、再利用されているんだなあと感心しました。三号墳を見ました。三号墳は山陽自動車道建設のために移築されていました。全長約六mの長さでした。移築されていたので綺麗でしたが、石室の石の間がコンクリートでかためられてあったので、こういうふうにしてもいいのかなあと思いました。この古墳群も六世紀後半位に造られたそうです。

この古墳群と本谷古墳群は時期的にも近く、距離も近いのでこの二つの古墳群の勢力はどういう関係だったのだろうと思いました。次にスベリ石一号墳にゆきました。この古墳は全長約九m強でこの周辺地域では最大の石室です。石もかなり大きな石を使ってあり表面も削って加工してありました。石室の中には土がまだ埋まっていました。だから高さがもう少し高くなると講師の先生が言われていました。この古墳は山のとても高い位置にあり、赤坂一帯がすべて見渡せるような、とてもいい場所にありました。それだけ被葬者は力をもっていたんだなあと思いました。墳丘の上から見ると円い形がよくわかると講師の先生が言われたので、見てみると言われたとおりでとても形がよくわかって、びっくりしました。この古墳は六世紀前半に造られたそうです。

最後に「イコーカ山古墳」に行きました。この古墳は直径二十五mの円墳でした。墳丘には円筒埴輪が並べられていたらしく、しかも二重だったらしいです。内部施設は未発掘で判りませんでした。頂上に座っていると、この下にまだ発掘されていない千数百年前のものが埋まっていると思うと興奮して胸が高なりました。この古墳は五世紀後半に造られたらしいです。すべての古墳めぐりが終わり、一番最後にお別れ会を行いました。終わりの挨拶をして散会となりました。今年も古墳めぐりで有意義な時間が過ごせました。そして今年は初めての場所だったので、いつも以上に新しい発見があり、とても良かったです。来年も参加しようと思っています。

古墳研究部会からのお知らせ

このたび「古墳ガイドブック・改訂版」（一八ページ）を刊行しました。以前に発行したガイドブックを加筆訂正したものです。ご希望の方には、実費・一部百円（送料は別途申し受けます）で頒布いたしております。

申込み先、古墳研究部会・会長山口哲晶さんへ。

電話〇八四九―四五―六一七三

総領町の史跡めぐり

田総長井氏興亡の跡

坂井　邦典

甲奴郡総領町は上下と庄原との間にある町で、田総村と領家村が合併して出来た人口一九〇〇人の町である。

この一帯は田総庄と称せられ鎌倉時代後期、備後守護の長井氏の一族が地頭として入部した（確かな年代は不詳）。長井氏は鎌倉幕府草創期の功臣、大江広元の次男時広が下野国長井庄の名をとり長井と称していたが、備後国田総庄にきて土着し田総氏と称したのである。なお大江広元の四男季光は安芸毛利氏の祖となった。

田総長井氏は嫡子単独相続制を採用し一族団結して所領を全うし、備後国人領主として三百年にわたり、この地に君臨した。が天正一九年（一五九一）三郎左衛門元好が毛利氏によって出雲国に領地替えになり、さらに関ケ原後は長州へ移動したのである。

次に守護と地頭の関係についてである。守護は庄園の領主として支配している。地頭は領民から料金を徴収して守護にわたすのが仕事である。しかし地頭は在地して根をおろしているから次第に勢力を拡大し、庄園領主と支配権をめぐって争いを起こしてくるようになった。その結果、幕府の法廷に持ち込まれて下地中分による和与となった。すなわち機械的に中央に線を引いて分割するということになり、田総地域が地頭、領家地域が領主の支配下となった。

▼歴史民俗資料館

役場の敷地内にあり、この地方の出土品から現代に至る民具・文書・書物などが展示してあった。とくに戦前戦中の物は子供時代を思い出し大変に懐かしかった。さらに役場の秋山さんと矢吹さんが一日中、同行して説明してくださった。

▼意加美神社

延喜式神名帳にのっている式内社である。芸藩通志によると長久三年（一〇四二）重修造立され、承久三年（一二二一）長井重広が遷座したといわれる。また長井時継が弘安三年（一二八〇）神社再建したという。現在の社殿は田総川の下流に築造中に灰塚ダムが二〇一七年に完成したら水没するので、町内五つの神社を統合して一つのお宮にまとめ、稲草山麓の現在地に新築したものである。創建時の祭神は「高靇神」（「闇お神」）とともに水を司る神様で、京都の貴船神社の祭神）吉備津彦命であったが今はその他多数となっているので略す。

▼川平山城跡

またの名を田総城、稲草山城と云う。康永年間（一三四二～四五）の築城という。標高三八〇m（比高一二〇m）、五段階の台地がある険しい山城である。南麓を田総川が流れている。城は南に面して北側は深い空堀で断ち切られている。城は田総庄を一望しうる中心地に築かれている。頂上近くに直径三mの大井戸があった。頂上の本丸最高部は非常に狭く七×五m位の広さであった。天文一三年（一五四四）田総氏はこの城にたてこもり、毛利氏の助けを受けて包囲した尼子氏と合戦し勝利したといわれている。

▼龍興寺（五雲山）

本尊は行基作といわれる観世音菩薩で三十三年に一回開帳の由。康永二年（一三四三）長井（田総）照重が鎌倉・建長寺の大覚禅師を招じて開基したといわれる。以後田総氏の菩提寺となっていたが長州へ引越しの後、曹洞宗に改宗した。その後火災にあい寺記などを焼失した。檀家数は四五〇軒ある由。

寺の入り口に備後西国観音霊場十三番札所の石柱や傘状の建物一本堂があった。この寺は雷よけの観音様と言われ古来より近在の人のお参りが多い。それで田総には雷が落ちないという。寺の裏山にある龍興寺墓地には室町時代より江戸時代にいたる小さい宝篋印塔及び五輪塔が沢山あった。いずれも上下違うものが適当に重ねてあり、どれも完全なものはなかった。川平山城ゆかりのものと伝えられている。

▼総領道の駅・節分草

役場の秋山さんから総領は産業が無いから少しでもお金を落として行ってくださいと云われ、会員一同はお礼をこめて土産物を買ったのである。

裏の橋を渡った所に節分草がはえていた。雪のある節分の頃から花が開くから名前がついたという。北向きのガラガラ石のある土地に生え、下草を刈らないと生えないから毎年の管理が必要である。高さ五cm位で小さな五弁の白い花をつけている。この近辺にしか自生していないキンポウゲ科の花で、町の天然記念物に指定されている。

▼領家八幡神社

この八幡社は田総庄の領家方の鎮守として創建されたもので、創立は弘安元年（一二七八）と伝えられている。文亀三年（一五〇三）田総信濃

守が再建し田畑を寄贈したが、慶長六年（一六〇一）福島正則が領主になった時に社領を没収されたという。どこにでもある村社級の大きさの社である。

絵馬が十枚ばかり掲げられているが、風雨にさらされて剥落著しく殆どが駄目になっているのが惜しまれる。ここにも節分草の小自生地があつた。

▼光明寺（金峯山）

曹洞宗。本尊・釈迦如来。寺伝によれば田総の地頭、田総城主永井重継が創建。開山は夢窓国師（一二七五～一三五一）という。元は臨済宗であったが福山城主・水野勝成が賢忠寺（曹洞宗）の末寺にした。享保一〇年（一八二一）焼失し、その後再建された。寺に水野氏の姫君愛用の駕籠、水野勝成使用の馬具、宇津戸住の丹下氏、寛文年間造の半鐘があった。現在は無住職で檀家数二二軒の由。

今まで、総領町は通過していただけなのでこのような史跡があることを知らなかった。この度、各所を見学し大変勉強ななり知識が広まった。説明して戴いた秋山さん矢吹さん有難うございました。会員を代表して心より深謝いたします。

比婆山・熊野神社行

三谷　尚克

いつか登ってみたいと思っていた。月曜は勤務があるしと迷っていた。会報で参加者が少ない事を知った。これで決まった。四月二二日七時五十分出発、快晴。東城を過ぎ小奴可ではバスの中から要害桜と鉄穴流しの跡を望遠する。西城町に入ると小鳥原という愛らしい名の付いた所がある。ヒトトバラと読む。江戸時代はシトトバラといった。シトトはホオジロ類の総称である。芸藩通志には「或いは神鳥の字を用ふ鵐と読む也」とある。

十時二十分「六の原」の県民の森に到着。ここからは歩いて三・二km登り一二五六mの頂を目指す。近くに金屋子神社が祀られている。天明四年（一七八四）に伯耆国日野郡宮市（鳥取県日野郡江府町宮市）の鉄山経営者・下原重仲著「鉄山必用記事」によると金屋子神が播磨国岩鍋に降臨し、その後白鷺に乗り西方を目指し、出雲国野義郡黒田の非（比）田に着き、桂の樹に羽を休ませていたところ、阿部正重という者が多くの犬を引き連れ、夜毎狩りをしていたが桂の樹に光があり犬が吠えたてた。正重が問うと自分は金屋子神で、ここに住んで「たたら」をたて鉄を吹く術を始めたいといった。正重は之を慎み承った。そして長田兵部朝日長者が社殿を築き、阿部氏の子孫は代々神主として現代に至っているという。非田は島根県能義郡広瀬町西比田で総本社もここにある。祭神は伊邪那美神が火の神を産む時女陰を焼き苦しんで吐いたヘドから生まれた金山彦命、金山彦姫を祀る。金屋子神はある時犬に吠えられて逃げ高殿の前で乱れた麻苧に絡まれ亡くなった。その死骸を高殿の柱に立て置くと金屋子神が生きていた当時の様に鉄が涌いた・・とある。岩鍋は兵庫県宍粟郡千種町岩野辺である。又、岩は鉱物に限らず堅い物を指す名である。

「県史跡、六の原鉄穴跡」に沿って登り始める。日の当たる所は暖かいが日陰は寒い。昨日の雨に洗われて若葉がまぶしい。大気が清々しい。すみれが可憐な花を精一杯咲かせている。ゆずり葉の付け根の赤い色がいい。そんな中、雪で枝の折れて新しい折れ口を見せる木が、それでも若芽を途中迄出しかけて命がつきた姿が痛々しい。処々に残雪をみる。登山道につかず離れず続いていた一筋の小さな流れは八合目に地の底から沸いている泉が源流であることが分かった。そして最後の曲がり角を曲がると一気に展望が開け頂に着いた。正午であった。付近は細長く平面が拓け樹齢一千年を誇るイチイ（栂）の巨木が規則正しく並んでいる。

最初の両側にある二本は門栂と呼ばれる。暫らく進めば大岩を乗せた円墳があり伊邪那美命の御陵とされる。古代祭祀の跡にふさわしい荘厳さが満ちている。

朝早く食事を取ったせいで十一時には空腹となり、飴やチョコレートで胃袋をだましだまし登って来たので食事にしますとの声を聞くなり一刻を争って昼食をとる。到々、比婆御陵に来たのだという感慨がこみあげてくる。

古事記に「故、其所避之所伊邪那美神者、葬出雲国与伯伎国境、比婆山之地」「かみさりましし伊邪那美神は出雲とははきの境比婆の山にはふりまつりき」とあり古きより信仰を集めてきた。但し日本書紀にはその記述はない。伊邪那美神を夫伊邪那岐は神話に最初に現れた夫婦の神で、国生みの神として知られる。

天の浮橋に立った二神は天の沼矛を海にさし降ろし、塩をこおろとかき鳴らし、矛を上げ先から水がしたたり塩が積もって淤能碁呂島ができた。

そしてあはじのほのさわけの島（淡路島）や、おおやまととよあきづ島（本州）等を次々と生み、今度は神々を生む途中で伊邪那美神が亡くなって比婆山に葬られた。そして御陵の側に立つ「神聖之宿処」と刻まれた石碑は「不如帰（ほととぎす）」の著者である徳富蘆花の兄でジャーナリストの徳富蘇峰の筆による。

帰りは別のルートを降りる。周囲は天然記念物のブナの樹林。木肌が美しい。道のほとりに山から石が崩れ転がっている。先般の地震のせいか。やがて出発地に降りて熊野神社へ。

熊野神社に着くと中国地方で三番目というコンクリート製の大鳥居が目に飛び込んでくる。鳥居という名の起源はよく判っていない。身分の低い者を「とり」といったので、とりはそこで控えておれと言ったのが鳥居になったという説。「通り入る」が訛ったか諸説ある。

正面に立てば背後に神奈備山としての比婆山がある。来待ちストーンの石段を登れば両側に天然記念物で樹齢千年を数える杉の大木が立ち並び参拝者を圧倒する。その根元に酢漿草（かたばみ）の可憐な花とシャガの群落。

左手には磐境があり、古代には祭祀がおこなわれた処。ここから最深部に進めば鳥尾の滝があり行こうと思ったがバスを降りた頃から急に足が痛く進めなくなりリタイヤー再訪を期す。駐車場でふと周囲を見回すと土筆があったので摘む。之は神徳か。やがて滝迄行かれた皆さんが帰られて出発。福山着七時前。充実した一日であった。企画された方々に深謝します。

『歴史小説読書会』【実施要項】

▼座長　種本実さん（歴史民俗研究部会・部会長）

▼開催日　八月四日（土）午後二時から四時まで。

▼場所　ふくやま市民交流館

▼課題図書

『落日の王子』（上・下）

文春文庫　黒岩重吾著

大化の改新で中大兄皇子等によって討たれた「蘇我入鹿」は、皇室との姻戚関係を背景に専横政治を極めた悪評高い人物と伝わっています。彼の実像について古代史小説の第一人者が描いた歴史小説の、読書後のコメントの交歓を行います。奮ってご参加ください。

法隆寺と藤ノ木古墳を訪ねて

土井　邦子

三月二十五日、青春切符の旅で奈良斑鳩を訪ねました。早朝五時、福山駅集合、常に五人一グループで行動して下さいとの指導のもとに、五時一八分の電車に乗り出発しました。

私は初めて訪ねる地に胸をわくわくさせながら嬉しさいっぱいでした。大阪着八時四四分。環状線に乗り換えて九時三四分、王子駅に着く。ここからバスに乗り換えて龍田神社前で下車、降りしきる雨の中、最初の目的地の吉田寺を訪ねました。吉田寺多宝塔は方三間二層の本瓦葺で高さは十二mあり室町時代の建物で、国重要文化財としては奈良県では唯一のものであるとのこと。今は別名「ぽっくり往生の寺」と呼ばれているそうです。

来た路を引き返して龍田神社へむかいました。

龍田神社の祭神は天御柱命、国御柱命、龍田比古命、龍田比売命の四柱であり、この地域の氏神様と聞きました。本殿の造り、鳥居の形からも由緒ある神社と思いました。

ここから歩いて約二十分、藤ノ木古墳に向かいます。生駒郡斑鳩町宝竜寺西二丁目に所在する円墳です。住宅地の中に一つ、ポツンと低丘陵があり、その中に復元された家型石棺が展示されていました。住宅地の一角に古墳がある。私にはすごい驚きでした。この古墳は南に向かって延びる低丘陵を利用して南東方向に横穴式石室を開口させており、石室全長一四・二m、幅二・七m、高さ四・三二mあり、石棺は長さ二・三m、最大幅一・二m、最大高さ一・五四m、くり抜式家型石棺で、蓋の両裾に縄掛け突起二対をもつ四突起型であると説明していただきました。現在四度目の調査が行われているそうです。

住宅と田圃路を歩き、次の訪問地の法隆寺へつきました。この頃より雨は小降りになりました。法隆寺は聖徳太子と推古天皇が六〇七年に建立し、官寺として朝廷の保護を受けて行くが、平安末期より太子信仰が高まり、太子信仰に支えられながら造営、修理等が行われ、寺勢は衰える事はなかったとつたえられています。

平成五年、法隆寺地域の仏教建物群は日本を代表する貴重な文化遺産として、ユネスコ条約に基づく「世界文化遺産」に登録されました。

境内は、金堂・五重塔・講堂など主要伽藍の西院と夢殿を中心とする東院の二つに区画されています。明

治時代、岡倉天心やフェノロサが法隆寺の調査に訪れ、秘仏であった夢殿本尊を開扉し法隆寺の文化的価値が広く知られるようになったといわれています。法隆寺は現在、国宝三八件、重要文化財一五一件を所蔵し、まさに世界的な仏教文化遺産の宝庫なのです・・と説明してもらいました。

西院の金堂は法隆寺のご本尊を安置する聖なる殿堂であり、四方に仏像が安置されていました。五重塔は釈迦の遺骨を奉安するためのもので仏教寺院において最も重要な建物とされています。大講堂は仏教の研鑽や法要を行う施設として建立されたものです。説明を聞きながらも建物の美しさ、立派さにただ感激でした。

大宝蔵院に入りました。夢違観音像(国宝)。正しくは大宝蔵殿の観音菩薩立像。この観音様に祈ると悪夢も吉夢に変えてくれるとの事です。百済観音像(国宝)。正しくは大宝蔵殿の観音菩薩立像。像高は二一〇・九㎝、約八等身の長身の像です。暫らく見とれてしまいました。

玉虫厨子の前に立ったとき、懐中電灯で照らして下さり玉虫の輝きを見ることができました。

東院に移動して夢殿を見学しました。夢殿は国宝。聖徳太子の遺徳を偲んで天平一一年に建てられた八角堂です。夢殿の名にふさわしい美しい貴品のある建物です。

こんなに美しい建物や仏像群が大切に保存されている平和な日本に暮らしている私達は本当に幸せです。日々の暮らしに感謝しつつ生活させてもらおうと思いました。

最後に中宮寺を訪れました。中宮寺のやさしい仏様の姿にホッと心が和みました。

「読者の広場」〔新設〕

先日の当会主催の「西石見を訪ねる一泊旅行」に参加された熊谷さん、種本さんが毎日新聞の投稿欄「街角」に投稿されたものが掲載されました。ご覧の方もあろうかと思いますが、今後新設する「読者の広場」コーナーの一事例としてご紹介いたします。ご投稿をお待ちします。

「助けられて」　熊谷　操子

福山にある「備陽史探訪の会」のバス例会。今月は年に一回の一泊旅行とあってメニューもすこぶる多い。津和野城跡・七尾城跡と周辺の神社仏閣を探訪。そのうえに柿本人麿・森鴎外・雪舟寺のこもごもも足で識ることができ、とても有意義なミニ旅であった。

城跡を目指しての山道は決して楽ではない。そんな時、「持ちましょう」と、まるでそれが当たり前のように、さりげなく私の持ち物を持ってくれる若い女性。うれしいなあ。

落ち葉や石垣で滑りそうになった時、サッとすかさず手を貸して下さる男性。うれしいなあ。

爽やかな風に労われて、本丸跡でペチャペチャおしゃべりしながら食べるお弁当のおいしいこと、おいし

Q&Aコーナー〔新設〕

会員の方から、「鯉のぼりはいつ頃から上げるようになったのでしょうか」とのご質問をお寄せいただきました。数冊の書物から次のようなことが分かりましたのでお答えします。

いまの様な鯉のぼりが庶民の庭先に立てられるようになったのは、江戸時代中期からといわれ、それまでの絵幟に代わって人気を集めるようになりました。明治末期までは紙製でしたが昭和になり布製が普及しました。

その昔、武士は戦いの時大きな吹流しを立てて、自軍の目印としていました。町家では武士と同じものでは気が引けるというので、代わりに鯉の形としたそうです。鯉は、天に登って竜になるといわれ、出世魚といわれ縁起を担いだこともあります。

吹流しは、鯉のぼりが普及すると、鯉の上に飾られるようになりました。

五月五日は端午の節句として、今では男の子の節句ですが、そもそもは女性の節句であり、娘たちは田植えの神を祀る為のショウブの葉で作った、「むすめのやど」に入って身を清めていたそうです。ショウブやアヤメは薬草であり、魔よけに効くといわれてきました。今日でもショウブ湯に入る習慣が残っています。

いつしか、ショウブは「尚武」とも読まれ、武を尊ぶとの意から男の子の節句となりました。武家の家では、五月の節句には門口に鎧や兜、幟などを立てて武勇を示していました。江戸中期頃から、門口から奥座敷に飾られるようになり、鯉のぼりや吹流しは外飾りとして用いられるようになりました。　文責・種本実

（参考文献・日本民具辞典、365日のひみつ　ほか）

◎事務局では、歴史に関する質問を歓迎します。どしどしお寄せください。

いこと。こんな幸せがあるからいまだに会を辞められないでいる私。

「古　城」

種本　実

薫風の休日、津和野を訪ねた。「山陰の小京都」津和野には名所旧跡が多い。中でも、蒙古来襲に備えて当地に入部した吉見氏が祖を築いた津和野城は、城下町のシンボルとして当地が生んだ文豪森鴎外なども幼少のころより仰ぎ見たことであろう。天守台、廓の遺構や石垣も見ごたえがあり、国指定文化財だけのことはある城郭である。

関が原以後、歴代城主によって連綿と整備されてきた津和野城跡にたたずんだとき、故三橋美智也が歌った「古城」の一節が脳裏に浮かんできた。

「松風騒ぐ丘の上、古城よ一人なに偲ぶ・・・」栄枯盛衰はこの世の常。現存する石垣のみは幾星霜もの動乱を知っているはずである。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

事務局日誌

四月六日（金）
役員会、参加十六名

四月八日（日）
徒歩例会　「古城山と笠岡の史跡を訪ねる」講師、岡田道章さん。
終了後、恒例の「お花見会」を開催。参加二十七名。

四月二一日（土）
「備後古城記」を読む。中央公民館にて開催。参加十五名。

四月二十二日（日）
バス例会「比婆山御陵と熊野神社を訪ねる」　講師種本実さん参加四十名。

四月二八日（土）
▼第四回郷土史講座「古墳時代の夜明け」　午後二時より、講師・山口古墳研究部会長、中央公民館にて開催。参加二十二名
▼「古墳口座Ⅷ」　ふくやま市民交流館にて、午後七時から開催、参加十三名。

五月二日（水）
役員会、中央公民館にて開催、午後七時より、参加十六名

五月五日（土）
「第十九回・親と子の古墳めぐり」赤坂・津の郷地区の古墳、「本谷遺蹟・坂部古墳群」他を探訪参加百四十四名。

五月十二日（土）
「備後古城記」を読む。中央公民館にて午後七時より開催、参加十一名。
▼終了後「行事案内」発送のための封筒詰め作業を実施。

五月十九日～二十日（土・日）
一泊のバス旅行「西石見の面影を訪ねる」参加四十六名。講師・旅行委員　坂本・塩出・種本。

五月二十六日（土）
▼第五回・郷土史講座「斎明天皇の狂心と当時の諸情勢」、午後二時から福山城・湯殿にて開催。講師、寺崎事務局長。参加四十八名。
▼「古墳講座Ⅷ」午後七時より、ふくやま市民交流館。参加一〇名。

『備後古城記』を読む

【実施要項】
座長　小林浩二さん
（城郭研究部会・部会長代行）
▼**開催日**　六月十六日（土）
午後七時～九時
発表課題　大町山城跡・兵庫城跡
▼**開催日**　七月二一日（土）
午後七時～九時
発表課題　阿草城跡・藁江城跡等
▼**場所**　福山市中央公民館
▼**会費**　一〇〇円程度（資料代）
・各担当者が福山市南西部地域野山城跡を現地調査して発表します。

『古墳講座Ⅷ』

【実施要項】
座長　山口哲晶さん
（古墳研究部会・部会長）
▼**開催日**　六月二十三日（土）
七月二十八日（土）
▼**時間**　午後七時～九時まで
▼**場所**　ふくやま市民交流館

◆名簿の訂正

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

◎なお、名簿の校正には力を入れたつもりですが、住所・電話番号に誤りがある時は事務局までご一報願います。

◎特別歴史講演会

主催　備陽史探訪の会
共催　広島県立歴史博物館

一、演題　「石室の特色から備後地方の後・終末期古墳を考える」
二、講師　脇坂　光彦　先生
三、場所　広島県立歴史博物館講堂
四、日時　平成十三年七月十五日（日）午後二時から午後四時
五、内容梗概

芦田川下流域には県内最大級の横穴式石室墳の集中地域が、福山市駅家町法成寺・中島・新山付近の服部川流域と深安郡神辺町湯野・西中条付近の高屋川流域との二か所認められる。

これらの大型横穴式石室は、構造的には近畿地方の大型横穴式石室の基本型である両袖式と片袖式のものがあり、単純にこの地域の首長墓としてはとらえにくい内容がある。さらに、これらに続く終末期には花崗岩切石による横口式石槨墳数基が営まれ、近畿地方の横口式石槨墳と連動した地域文化が顕著となる。

こうした特色ある古墳は、六世紀後半から七世紀にかけての一〇〇年以内に営まれており、この時期は、奈良県の飛鳥地方を拠点とした古代国家の形成途上にあたっている。備後国が成立したのは七世紀の第三四半期末から第四四半期と考えられるが、芦田川下流域の主要古墳は、この時期における国家形成の地域の政治的動向を反映したものととらえるとき、例えば「品治国」や「吉備穴国」を営んだ首長層が、古代国家の一官人等に組み込まれたりしていく過程を示す考古資料と見ることができよう。（脇坂先生からご送付の原文を掲載）

六、講演会終了後、脇坂先生を囲んで居酒屋「おくんち」（駅北オリエンタルホテル隣）TEL三七―三九〇八にて、会費三、〇〇〇円程度で懇親会を開催します。

多数のご参加をお待ちします。

第六回・郷土史講座
「山内首藤氏と毛利氏の時代」

（起請文と合戦手負い注文からも見てみる）

西国は平氏の拠点地域であり、安芸の厳島神社や備後一宮の吉備津神社はじめとして、すべて平氏方であった。平氏の滅亡後に関東から源氏方の武士が入国してきた。

今回の主題の山内氏も、毛利氏も関東からやってきた。小早川氏も箱根駅伝のコース沿いを流れる「早川」の上流を拠点にしていたことから「小早川」と名付けている。

県北の雄族であった山内氏を中心とて、大内氏の輩下として、後に尼子氏をも圧倒してゆく毛利氏との関わりを通じて、この時代の様相を起請文や合戦手負いからも見ていこうと思っている。

（講師の堤さんの原稿）

実施要項

《講師》堤　勝義さん
《開催日》六月三〇日（土）午後二時～四時まで
《会　場》中央公民館
《参加費》一〇〇円程度（資料代）

結婚おめでとう！

会員の小原範子さんが、広島市のセンチェリー21で、三月十六日（土）、華燭の典を挙げられました。

お相手は広島市在住の新井敦志さん。写真を拝見すると、とても男らしくて素敵な方です。

これからも「新井範子」さんとして会の行事に参加して下さいネ。

会報一〇二号の原稿募集

原稿締め切り、七月二一日（土）

▼紙面編成の都合もありますので、極力早めのご投稿をおまちしています。「本文一行一六文字×一二〇行」で一ページとなります。四〇〇字詰め原稿用紙使用の場合は、下四字分を空白にして、一行一六字として書いてください。

▼会の運営、会報のあり方等々にたいするご意見もお寄せください。お待ちしています。

【編集後記】

▼新たな試みとして「Q&Aコーナー」を新設したほか、城郭研究部会、小林浩二・部会長代行の「**備後福山領古城記**」の連載を開始します。ご期待ください。その他「**読者の広場**」的なコーナーの一事例として、熊谷さん、種本さんの投稿作品を紹介させて頂きました。

五月の「行事案内」でもお願いしましたが、多くの方々の紙面参加をお待ちしています。

▼最後に本紙編集に当たっては、従来からお力を発揮されている「磐座亭主人」の絶大なご援助を頂きましたことを報告、御礼にかえます。

M・S記

備陽史探訪の会事務局　〒720-0831
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九（五三）六一五七